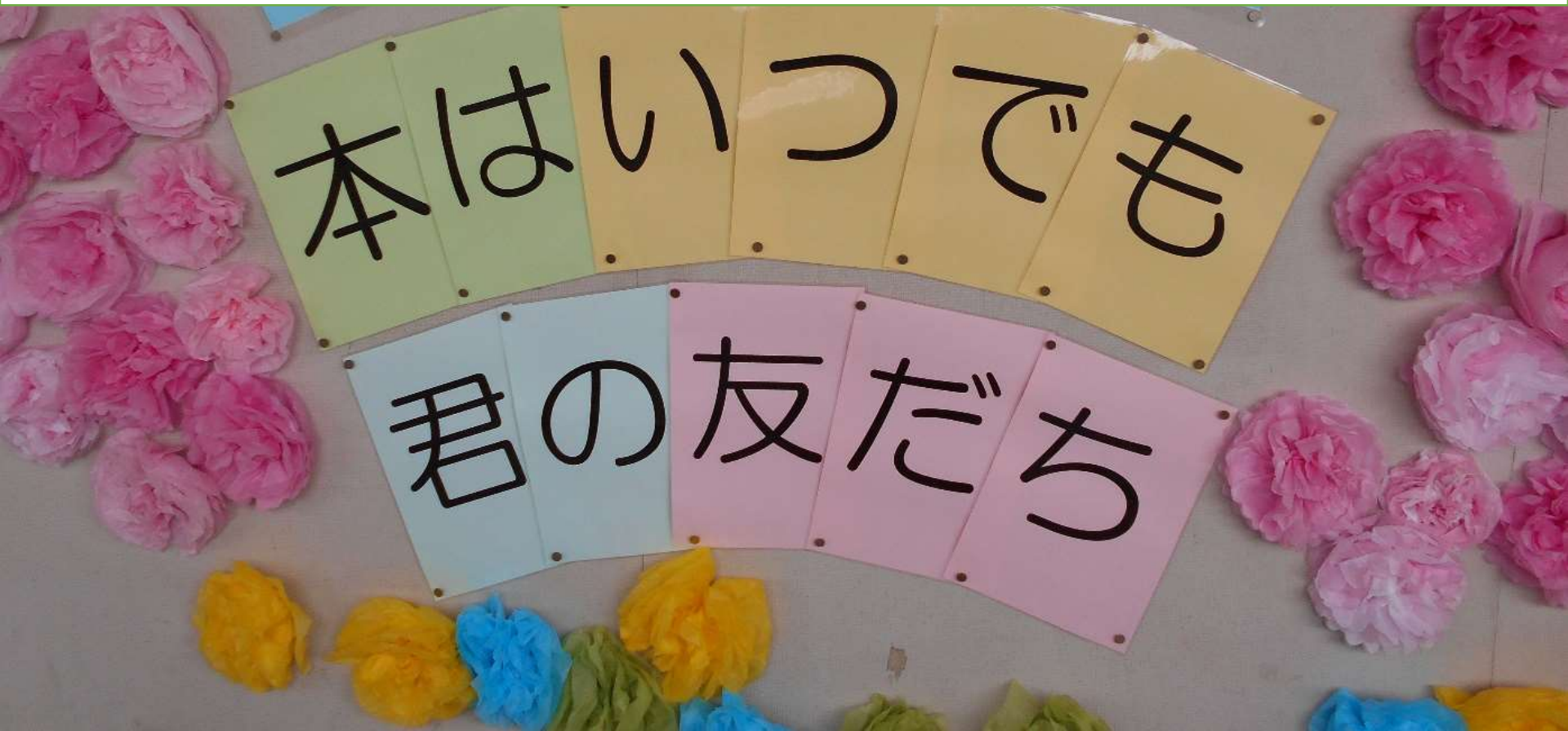
希望をともにつくりだす

横浜市立豊田小学校



学校司書からおすすめの本

グスコーブドリの伝記

宮沢賢治／作

横浜市立豊田小学校

あらすじ

グスコーブドリは、イーハトーブの森に住む男の子です。

両親と妹のネリと一緒に家族４人で楽しく暮らしていました。

しかし、ブドリが１０歳の年に寒い日が続き、畑の作物が育たなくなってしまいました。寒さはその次の年も続き、ついに翌年の春には食べるものがなくなり、お父さんとお母さんは森へ行くと言って出て行ったきり、帰ってきませんでした。

何日か過ぎたある日、人さらいが妹のネリを連れ去ってしまいました。

ブドリは必死で追いかけましたが追いつかず、ついに疲れ果てて倒れ、気を失ってしまいました。

ブドリが目を覚ましたとき、そこは自分の部屋だと気がつきますが、目の前にヒゲの男が立っていました。

その男は自分を工場主だと名乗り、ブドリの家はすでにマユを育てる、「イーハトーブてぐす工場」に変わっていました。

ブドリはその工場で働くしか道がありませんでした。

ある時、急に近くの火山が噴火し、降ってきた灰で工場のマユは全部死んでしまい、工場の親方も働いていた人たちも、みんな逃げ出してしまいました。

一人残ったブドリもついに家を出て、新たな居場所を探して何日も歩き続けました。

やがてイーハトーブの広い野原に着くと、そこの赤ひげと呼ばれる農夫とそのおかみさんのもとで暮らすことになりました。

その家には息子がいましたが、すでに亡くなっており、ブドリは死んだ息子さんの部屋に住まわせてもらい、そこにあったたくさんの本を読んで世話になっている赤ひげ夫婦のために、一人で一生懸命勉強を続けました。

　中でもクーボー博士という人の本は、面白く、いつかはクーボー博士のいるイーハトーブ市の学校で勉強したいと思うようになりました。

しかし、ここへきて２年目、雨がほとんど降らなかったため、作物が取れずとうとうたくわえもなくなってしまいました。
　赤ひげはブドリに、「ここではもう働いてもらうわけにはいかない。」と言って、息子の本とお金と新しい上着をくれました。

ブドリは赤ひげ夫婦と別れたくはありませんでしたが、何べんもお礼を言って、イーハトーブ市をめざして汽車に乗り込みました。

イーハトーブ市についたブドリは、すぐにクーボー博士の学校を訪ねました。そこでクーボー博士の試験を受け、博士からいろいろな質問を受けますが、ブドリは赤ひげの息子の本を残らず読んでいたので、すらすら答えることができました。

ブドリの答えに満足した博士は、ブドリが仕事を探している事を聞くと、すぐに名刺をくれて仕事を紹介してくれました。

ブドリが名刺の宛名を訪ねて行くとそこはイーハトーブの「火山局」でした。

ブドリはそこのペンネン技師に付いて勉強をしながら夜も昼も働き、２年目にはもう、イーハトーブのすべての火山の事ならどんなことでもわかるようになりました。

ある晩、観測をしていた近くのサンムトリ火山が、急に噴火の前触れの動きをしたので、ブドリとペンネン技師は火山の頂上近くにある観測小屋に行き、二人は交代しながら何日も観測を続けました。

そしてペンネン技師の計画どおりサンムトリ火山の大規模な噴火を食い止める事ができ、サンムトリ市を救うことができました。

その５年後、火山局ではブドリが中心となって、夏に空から雨と一緒に肥料をまく計画をたて、それが見事に成功し、その秋の収穫はこの１０年でも最高の出来となりました。

そして、ブドリのことを新聞で知った妹のネリと再会する事ができました。

楽しく満ち足りた５年間が瞬く間に過ぎ、ブドリが２７歳の年に、イーハトーブがまた厳しい寒さにおそわれました。

ブドリはこのままでは来年が子どもの時の飢饉のようになってしまう、とおそれ、何とかイーハトーブを救う方法がないか、と考えつづけました。

そして、ブドリはある方法を思いつきます。

　それは空気中の炭酸ガスを増やして気温を上げるために、島全体が大きな火山になっているカルボナード火山を爆発させるというものでした。

この計画をクーボー博士に話したところ、博士は、

「それはいい考えだ、うまくいけば気温を５度くらい温かくすることができるだろう。だが、それには一つ問題がある。

何しろ難しい仕事だから最後まで島に残って機械の操作をする人が必要なのだ。つまり逃げられない人が・・・。」

ブドリは、「わかっています。先生、ぼくにそれをやらせて下さい。」と願い出ました。

ブドリがペンネン技師に計画を打ち明けると、「なるほど、やってみる価値はありそうだ。だが最後の役目は私がやろう。」と技師が言うと、

ブドリは、「この仕事は必ずしも成功するとは限りません。思った通りにいかなかった場合は、そのあとの工夫をクーボー博士やペンネンさんにしてもらわなくてはなりません。」ときっぱりと言うと、ペンネン技師はだまって首をたれるしかありませんでした。

そして計画通りカルボナード島で爆破の準備作業が行われました。

ブドリは作業を終えた火山局の船が桟橋から出て行くのを一人見送りました。
いよいよ計画実行の日です。

ブドリは落ち着いた様子で機械装置を点検すると、最後の仕上げにかかりました。火山局のほうでは、すべての準備が整いました。あとはカルボナード島に一人残るブドリがスイッチを入れるだけです。

グラグラゆれる観測小屋では、地震が次第にはげしくなります。

「さあ、いまだ！」

ブドリはにっこり笑うとスイッチをグイと押しました。
島は一瞬白く、そしてオレンジ色に輝き花火のように溶岩を噴き出しました。

カルボナード島は、岩のかけらとなって海に降り注ぎました。

それから３・４日たつと、気温がぐんぐん上がり、暖かくなってきました。
計画はみごとに成功したのです。

その年の秋にはまたいつもと同じような豊作にめぐまれ、イーハトーブの人たちはその冬を暖かい食べものと、明るい焚き木で楽しく暮すことができました。

おしまい

学校司書から

　今、この新型コロナウイルスによる緊急事態宣言の中、４月２１日の時点で唯一感染者が発生していない県は岩手県のみとなっています。

　岩手県はこの「グスコーブドリの伝記」の作者、宮沢賢治の生まれ故郷です。

　私は賢治の数々の作品から、自分のことはかえりみずに、「人々の本当の幸せ」のために身を粉にして働く人の姿を目にします。
　そして、私は勝手に「賢治の心」がイーハトーヴ（岩手）を守っているのだろうと思っています。

今まさにこのひっ迫した状況下、医療関係をはじめ、さまざまなライフラインに従事する人々に、敬意と感謝の気持ちを表す行動があちこちで沸き起こっています。

私は学校司書として、みなさんに宮沢賢治のこの「グスコーブドリの伝記」を紹介する形で、感謝の気持ちを表すと共に、改めて『本の力』を伝えたいと思います。

外出自粛が続き息苦しさも感じますが、本には、今まで自分が知らなかった世界へと導いてくれる大きな力があり、それは新たな喜びへとつながっていきます。

『家にいよう！じっくり本を読もう！』

横浜市立豊田小学校

人の集まる場所への外出を避けて
基本的に自宅で過ごすようにしてください。

ステイホーム

(stay home)

希望をともにつくりだす

横浜市立豊田小学校